



(豊明)

発掘調査は、史跡公園整

のところに位置する。

間古戦場跡は、西南西4km

ことでも著名である。桶狭

たという伝承が残されている

夜に、今川義元が宿営した

(二五六〇)の桶狭間の戦前

また、本城跡は、永禄三年

前後で、平城と考えられる。

本遺跡は、名古屋市南東部から隣接する豊明市にかけて、北西から南東にのびる低丘陵の先端に立地する城跡である。標高は二二m

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

6 遺跡の年代 一五世紀末〜一六世紀

5 遺跡の種類 城館跡

4 調査担当者 伊藤秋男・松原隆治・木村光一

3 発掘機関 豊明市沓掛城址発掘調査団

2 調査期間 一九八一年(昭56)二月〜一九八四年二月

1 所在地 愛知県豊明市沓掛町字東本郷

愛知・沓掛城跡

8 木簡の积文・内容

・食物残滓などが共伴している。

・箸・膳・漆器など、当時の日常什器と考えられるもの・土器・陶磁器

備の事前調査として、主に本丸跡を中心に行った。調査の結果、大きく三期に分かれる遺構群を検出した。木簡は、そのうちで最も下層の生活面から検出された汚水だまりと考えられる池(SG〇一)から、すべて出土した。この池からは、ほかに多量の木製品(桶・鍋蓋

(1) ・「ト」

「ト」

108×(105)×4

(2) 「ト」

50×(15)×2.5

(3) 「ト」

十七

「ト」

51×26×4.5

(4) 「ト」

十七

「ト」

(5) ・「天文

(穿孔)

十七」

・「(穿孔)
(花押)」

本城跡出土の墨書の認められる木簡は、ほかに二八点、計三三三点にのぼる。ほかの二八点は、昨年の本誌上において、その概要は発表済であり、今回の五点は、遺物再整理の段階で新たに発見されたものと、諸般の事情で、前回発表できなかったものである。

(1)については、文字として認められる部分もあるが、文字の方向も一定せず、一貫した意味をなさない。落書の類と考えられる。(2)についても、墨痕はあるが文字ではないとも考えられる。(3)~(5)は、前回発表した(7)・(8)、『木簡研究』七号)と同様の形態・墨書をもつもので天文一七年(一五四八)を表わすと考えられる。

なお、(4)・(5)の木簡の法量が未記入であるのは、実測前に、保存処理に出してしまった当方の不手際の結果であり、もし機会があれば、後日何らかの形で発表したい。

また、昨年の本誌上では触れなかったが、木簡の积文・解読については、愛知教育大学教授新行紀一氏に、そのための赤外線テレビ撮影については、浜松市立博物館の向坂鋼二・漆畑敏の両氏に、様々な点でお世話になった。ここに、あらためて感謝の意を記させていただきます。

9 関係文献

伊藤秋男・木村光一「愛知沓掛城跡」(『木簡研究』七号 一九八五年)
豊明市教育委員会『沓掛城址』(一九八六年・印刷中)

(木村光一)

